様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月 ２０ 日現在

機関番号：３３９０８
研究種目：研究活動スタート支援
研究期間：2019～2022
課題番号：１９Ｋ２３２５８

研究課題名（和文）現代日本における階層帰属意識の規定メカニズムの計量的解明

研究課題名（英文）Quantitative Elucidation of the Mechanism of Status Identification in Contemporary Japan

研究代表者
谷岡　謙（TANIOKA, Ken）

中京大学・文化科学研究所・特任研究員

研究者番号：９０８５２２６０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、グループレベルでの階層帰属意識の規定メカニズムを計量的に明らかにすることである。
Finite Mixture Modelsといった潜在クラスモデルを用いて、階層帰属意識の時点間比較を行い、「静かな変容」のより詳細な検証を行った。
その結果、「静かな変容」は①高階層性クラスの構成割合が増加、②高階層性クラスの階層性がさらに上昇、という異なる段階を踏んで進行したことが明らかとなった。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究は、階層帰属意識研究において、グループレベルでの視点や分析方法を新たに提示した点に、大きな学術的意義があると言える。
今後の階層帰属意識の規定構造を検証する際にも、特に階層性の強弱に基づくグループ性は、その性質の変化を捉える際に重要な視点になると考えられる。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this research is to clarify the mechanism at work behind status identification at the group level.
Using latent class models such as Finite Mixture Models, I conducted a comparison over the past two decades of status identification and conducted a more detailed verification of the 'Quiet Transformation'.
As a result, it was found that the 'Quiet Transformation' progressed through different two stages: (1) the composition ratio of high-hierarchy class which has high coefficients of determination of status identification (R2) has increased, and (2) the R2 of the high-hierarchy class further has increased.

研究分野：社会学

キーワード：階層帰属意識　社会意識　階層意識　社会階層

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

近年の階層帰属意識研究では、「静かな変容」（吉川徹 1999）が継続しており学歴・職業・収入といった客観的な地位変数との結びつきが強まっていることが確認されている。さらには、結婚行動との関連（藤原翔 2015）や公衆衛生分野において、階層帰属意識が主観的健康のみならず実際の健康度にも影響することが確認されている（神林博史 2016）。そして、ある時点での健康状態がその後の階層的地位に影響することも実証されつつある（神林博史 2018）。これらの状況を鑑みれば、階層帰属意識は人びとの行動や健康に影響するという重要性のみならず、階層的地位が階層帰属意識を通じて、その後の階層的地位に影響を与えるという再帰性が実証されつつある状況にあるといえるだろう。総中流社会においてメイントピックとして扱われた階層帰属意識だが、階層的地位との関連性が強いのは現代の格差社会においてであり、今の時代こそ階層帰属意識の規定メカニズムを特定し、より研究を深めていく必要がある。

その階層帰属意識研究において、今なお課題として残されているのが、「静かな変容」という客観的な階層との関連性の強まり、つまり階層性の上昇はなぜ起きているのか、そのメカニズムが判明していないということである。数理的なアプローチも多数存在するものの、階層性上昇の全てを説明することはできていない。階層性が高い、つまり客観的な格差との関連が強い今の時代だからこそ、階層帰属意識の規定メカニズムを明らかにする必要がある。

２．研究の目的

本研究では、近年の研究において明らかになりつつある階層帰属意識のグループ性を活かすことにより、グループレベルでの変化に分解することで、現代日本における階層帰属意識の規定メカニズムを明らかにすることを目指す。グループレベルでの違いが、階層帰属意識の規定メカニズムを複雑にしていると考えられるからである。近年確かめられつつある、年齢グループや学歴グループ、その他複合的地位グループによる変化として、階層帰属意識の変化を分解することにより、どのグループの変化が全体の変化として現れており、その変化を引き起こしている要因を特定する。全体を分析していた際には、分かりづらかった変化を特定することで、階層帰属意識の規定メカニズムを計量的に記述することを目指す。

３．研究の方法

グループレベルでの階層帰属意識の規定メカニズムを計量的に明らかにするにあたって、本研究が着目するのは、性別のみならず年齢や学歴といった基底的な属性に基づくグループレベルでの違いである。このような基底的な属性によって、日本社会が分断されつつあるという指摘はすでに多数存在しており（e.g.,吉川徹 2018）、その社会の分断・断絶を階層帰属意識という社会意識を通じて明らかにすることにも繋がる。また、階層帰属意識研究で使用される方法の多くは重回帰分析だが、本稿が用いるのはそれに加えて、多母集団潜在クラス分析や Finite Mixture Models である。これらの潜在クラス分析を用いることにより、複数グループの規定メカニズムを比較することができる。

分析に使用するのは、「社会階層と社会移動全国調査（SSM 調査）」と「階層と社会意識全国調査（SSP 調査）」のデータである。これらは全国規模で行われた日本を代表する社会調査であり、先行研究でも使われている。これらの調査データの 1985 年から 2015 年のデータを使用することで、近年における階層帰属意識の静かな変容について、グループレベルでの詳細な変化を明らかにする。併せて、「働き方とライフスタイルの変化に関する全国調査（東大社研・若年壮年パネル調査）」データを用いて、グループレベルでの個人内変化の様相を明らかにすることで、グループレベルでの既定メカニズムを詳細に明らかにする。

４．研究成果

１年目は、グループレベルでの階層帰属意識の個人内変化に注目しパネルデータによる分析を行った。具体的には、東京大学社会科学研究所の「働き方とライフスタイルの変化に関する全国調査（東大社研・若年壮年パネル調査）」データを用いて、個人内効果と個人間効果を識別可能なハイブリッドモデルによる分析を行った。この分析では、階層帰属意識の個人内変化について、①学歴（大卒・非大卒）によって個人内効果に違いはあるか、②個人内変化において生活満足度はどのような効果を持つか、の 2 点に注目し分析を行った。その結果、①学歴によって個人内変化に効果のある変数は異なるが、高い階層帰属意識への変化に影響する変数は大卒・非大卒に関わらず少ない、②大卒層においてのみ生活満足度の上昇が高い階層帰属意識に繋がる、という 2 点が明らかになった。①については、時代変化の研究で明らかになったグループレベルでの規定要因の違いが、個人内変化においても当てはまることを発見したと言える。②については、生活満足度の移行率に学歴差は見受けられないため、生活満足度の変化が階層帰属意識に与える影響に学歴差があるのだと考えられる。また、生活満足度は他の階層変数と異なり、階層帰属意識の変化との間のタイムラグが小さいと考えられるため、大きな効果を持っていると考えられる。この研究成果は、「戦後日本の社会意識の変容過程についての計量社会学的研究」（発行：東京大学社会科学研究所）に掲載された。

2 年目は、階層帰属意識の潜在クラス分析を用いた研究成果が掲載された共著英語書籍が Routledge 社から発刊された。この研究では、多母集団潜在クラス分析を用いて時点間比較を行い、地位グループの割合とその階層帰属意識との関連が変化するという 2 つの要因によって、近年の静かな変容が引き起こされていることを明らかにした。具体的には、特に学歴・職業・収入のすべてが高い上位一貫グループの階層帰属意識が特に上昇していることと、学歴のみが高い高学歴非一貫層が増加していることにより、分布の無変化と階層性の上昇という変化が起きていることが明らかとなった。

3～4 年目は、SSM 調査や SSP 調査の複数時点（1985 年～2015 年）のデータを用いて、Finite Mixture Models（FMM）と呼ばれる潜在クラス分析の一種を用いた分析を行った。その結果、時代によって階層帰属意識の「静かな変容」の様相が異なっていたことが明らかとなった。具体的には、1985 年から 1995 年にかけては、高階層性クラスの構成割合が増加するというかたちで全体の階層性が高まったように見えていた。そして 1995 年から 2015 年にかけてはその高階層性クラスの階層性がさらに高まるというかたちで全体の階層性が高まったように見えていたのである。これらの研究成果をまとめたものを「第 73 回数理社会学会大会」で報告し、他の研究者からのコメントを受けて修正した研究成果が「中京大学現代社会学部紀要」に掲載された。

今回の一連の研究によって、グループレベルでの階層帰属意識の規定メカニズムにおいて、1.学歴グループによる階層帰属意識の個人内変化の違い、2.潜在地位クラスの変化によって引き起こされる階層帰属意識の時代変化、3.階層性の異なるクラスの変化によって引き起こされる階層帰属意識の時代変化、という 3 つの発見があった。各グループレベルでの変化の詳細が明らかになったことや階層性の異なるグループを発見したことから、既定メカニズムの完全な解明に向けて確かな前進があったと言える。しかし、グループレベルで見た際の階層帰属意識の複雑さが明らかになった側面もあり、今後の研究でより詳細な検討が必要となっていくだろう。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計2件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　2件）

１．著者名 谷岡謙	４．巻 71
２．論文標題 学歴による階層帰属意識の個人内変化要因の違い：生活満足度の変化に着目して	５．発行年 2019年
３．雑誌名 戦後日本の社会意識の変容過程についての計量社会学的研究（SSJDAリサーチペーパーシリーズ）	６．最初と最後の頁 104 - 118
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 谷岡謙	４．巻 16
２．論文標題 階層帰属意識の潜在構造分析　―Finite Mixture Modelを用いた「静かな変容」の検証―	５．発行年 2023年
３．雑誌名 中京大学現代社会学部紀要	６．最初と最後の頁 139-158
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計1件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 谷岡謙
２．発表標題 Finite Mixture Modelを用いた階層帰属意識の時点間比較分析
３．学会等名 第73回数理社会学会大会
４．発表年 2022年

〔図書〕　計1件

１．著者名 Carola Hommerich, Naoki Sudo, Toru Kikkawa (Chapter3: Ken Tanioka)	４．発行年 2020年
２．出版社 Routledge	５．総ページ数 186
３．書名 Social Change in Japan, 1989-2019 (Chapter3: Change or No Change? The Complex Relationship between Status Groups and Status Identification in Heisei Japan)	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関